

向学館通信

2008・7・26

楽しい夏休みが始まりました。

夏休みの生かし方が秋以降の学習にダイレクトにつながります。宿題は、なるべく早めに！ 自習に来て宿題も片付けよう。

身体を使う、本を読む、自然の中で過ごす、など有意義な時間をすごしましょう。そして、勉強も！

夏休み、子供たちにとって頭が痛いのは「宿題」・・・今回は「宿題」について考えます

家庭学習の大切さは言うまでもありません。そして、この大事な家庭学習のかなりの割合が宿題なのです。とくに、夏休みは、大量の宿題が出されます。この宿題に関して、普通は「当然のこと」と受け止められているようですが、長年、個別指導という教育方法に携わってきたものとしては、「当然」というより「異常なこと」に見えているというお話をさせていただきます。

学校の宿題は、全員に同じ問題が出され、しかも、量が多い。しかし、生徒の学力は、できる子とそうでない子のあいだは、かなりの開きがあります。こうした事実から、次のような問題が起こります。つまり、学力のある子には、簡単すぎておもしろくない問題をたくさんやらされるので、ほとんど「勉強」といえないような無意味な努力を強いられるということです。逆に、成績の良い子には、できる子に比べて3倍も5倍も時間をかけながら、教えてくれる人がいないために難しい問題は解けない、分らないというままだにしがちです。これも「勉強」になっていないのです。

このように、成績の上位の子と下の方の子とでは、同じ宿題がまったく違う意味を持っていながら、「時間をさせる割には、学習効果が低い」という点では共通しています。こうした大事なことは、一般にはあまり問題にはされていません。学校の先生方も、なかには矛盾を感じておられる方もいらっしゃるでしょうが、たいていは「機械的に」宿題を出しているような気がします。塾でも、宿題は多い方がいいと信じているような指導をして、子どもたちから活発さや創造力を奪っているようなケースもよく見かけます。

さて、では個別指導ではこの問題をどう考えるのか。ここで考え方の原点を説明しておきます。次に示す文章は、この5月に塾内での「講師研修会」で用いたレジュメです。参考までに掲げておきます。

個別指導という学習方法がなぜ生まれたか？（「講師研修会」レジュメからの抜粋）

◆たとえば、同じテストを三人が受けたとする。10問のうち間違えた個所はみな違う。

A君は、5, 7, 8番の問題ができなかった。

B君は、3, 6, 7, 10番の問題ができなかった。

C君は、1, 2, 4, 6, 9, 10番の問題ができなかった。

このように、分らないところは、人によって異なっている。一斉授業では、この三人に分からせるためだけでも、全問を教える必要がある。実際、A君にとっては、5, 7, 8の問題だけ聞きたいのだが、分りきった問題にも全部つき合わされる。これは、まったく時間の無駄である。

たとえば、1問の解説に3分ずつかかったとすると、10問で30分かかる。しかし、A君にとっては、自分の学習時間は、たったの9分しか使っていない。約20分は、無駄な時間である。こうした無駄を省くだけで（教え方の良し悪しは別にしても）格段の効率アップが可能になる。ところが、個別指導と称しながら、テキストのすべてのページ、すべての問題をやらせるとしたら、一斉授業と何も変わらない。テキストの全問題をやらせるくらいなら、授業料の安い一斉塾へ行ったほうが良い、ということになる。

授業料は高くても、進むスピードが違う、分かり方も違う、というのが個別指導の良さなのである。

教科ごとの特徴と教え方の違い **数学**

① 分かっている問題、もともと解ける問題は、やらせない。⇒ 時間と労力のムダをさせない。

② どうしても分らない問題は長時間考えても無意味。⇒ たいてい、頭を休めているだけ。

⊗考えても分らなければ、教えるか、解説を読ませて、徹底的に分からせる。

③ 分らない問題のうち遡行が必要なものは、遡行教材を使用する。